

シシィ・彷徨の皇妃エリザベート



オーストリア皇帝に嫁いだバイエルン公女エリザベートの生涯

1837年のクリスマスにバイエルン王国に生まれた公女エリザベート。シシィと呼ばれた彼女は15歳の時、姉ヘレーネとオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの見合いの場に同席したことから、皇帝のプロポーズを受けてオーストリア帝国・ハプスブルグ家の皇妃となった。しかし、ハプスブルク家の厳格な宮廷儀礼は自由に育ったシシィには馴染めないもので皇帝の母ゾフィとの確執に傷つき、生まれた長女と皇太子ルドルフはシシィから引き離され、彼女は皇帝を愛しながらも心身の傷を癒しに漂泊の旅に逃れる。世紀末のヨーロッパ王室は自由主義と革命の動乱の時代を迎え、ルートヴィヒ2世やメキシコ皇帝マクシミリアン、皇太子ルドルフなどシシィと皇帝の親族には次々と不幸と死が見舞った。やがてシシィにも

死の影は追い付く。美貌を讃えられたオーストリア皇妃エリザベートの生涯。

[第1章](#)・クリスマスの誕生、バイエルンの薔薇、フランツ・ヨーゼフ皇帝の一目惚れ

[第2章](#)・厳格な宮廷への反発、姑との確執、彷徨の旅人、斜陽のハプスブルク

[第3章](#)・ハンガリーとの2重帝国、ルートヴィヒ2世、ルドルフ皇太子、旅先での死

エリザベート

バイエルンの薔薇

1837年12月24日、バイエルン王国(現在のドイツ連邦南部バイエルン州)の首都ミュンヘンでヴィッテルスバッハ公家に女の子が誕生した。父マクシミリアン・ヨーゼフ公爵はヴィッテルスバッハ分家の長。母ルートヴィカはバイエルン王マクシミリアン1世の王女。クリスマス・イブに生まれたこの第4子は、ルートヴィカの伯母であるプロイセン王妃から名前をもらいエリザベートと名づけられた。

当時のバイエルン王国はルートヴィヒ1世の治世で、国王はミュンヘンにローマ風の建築物を作ろうと、工事を急がせていた。バイエルン王家のヴィッテルスバッハ家の血統は、芸術家肌の奇行を行ったり、精神異常を来す人物が生まれることでも知られていた。マックス公と呼ばれたエリザベートの父マクシミリアンも異常者ではないが、奇行の多い人物だった。ミュンヘンの宮廷や社交界にはあまり顔を出さず、狩猟や釣りを好み馬に乗って山や森を駆け巡り、村々を泊り歩いた。旅行を好みギリシャ、トルコ、エジプトへ渡り、カイロでは黒人奴隷4人を買入れ自分の使用人にした。集中力があり、楽器のチターに凝り、エジプトのピラミッドの上に登り音色を奏でた。また、文芸にも秀でペンネームを使って戯曲や詩作を書いた。経済観念には乏しく、財政は窮乏していたが教養、知識があり貴族でありながら共和主義的な自由人であった。この気質はエリザベートにも遺伝した。

マクシミリアンは8人の子供をもうけた。長男ルードヴィヒ・ヴィルヘルム、次男ヴィルヘルム、長女ヘレーネ、次女エリザベート、3男カール・テオドール、3女マリー・ゾフィー・アマリエ、4女マチルダ・ルドヴィカ、4男マクシミア・エマヌエル。ルートヴィカは分家の気軽さから当時の習慣に反して、子供たちを手元で育てた。兄弟姉妹は冬期は首都で、夏季はバイエルン高原ポッセンフォーフェンの館(通称ポッシ)で、美しい自然の中で時を過ごした。「シシィ」と呼ばれた次女エリザベートは家庭教師のルイーゼ・ヴェルフェン男爵夫人を付けられたが、シシィは馬や犬と戯れ、絵を描き、父と同じく詩作に没頭した。マックス公もそんなシシィの性格を愛し、開放的な教育をさせた。やがて運動神経に優れたシシィの乗馬技術は上達し、山野を駆け巡る。勉強とピアノは不得意であったが、興味を持った事には高度な集中力を示した。

ポッセンフォーフェンにはルートヴィヒ1世の孫、シシィより8歳年下の後のバイエルン国王ルートヴィヒ2世も訪れてシシィやカール・テオドールと遊んでいる。48年夏ルートヴィカはヘレーネ、シシィを連れてインスブルックに妹ゾフィーを訪れた。ゾフィーはハプスブルク家のオーストリア皇帝の弟フランツ・カールと結婚し、大公妃になっていた。フランツ・カールとゾフィーの長男フランツ・ヨーゼフ・カールは30年生まれの18歳で、10歳のシシィを気に留めたのは33年生まれ、15歳の3男カール・ルードヴィヒだった。ルードヴィヒはシシィに手紙を書き、贈り物を贈った。シシィも返事を書き、やはり贈り

物を送る。シシの手紙には森や湖の事、母にもらった羊の話や旅芸人に会ったことが書かれていた。

揺れるハプスブルク帝国

48年はヨーロッパ19世紀の中間で「狂瀾の年」と言われた。フランス大革命からナポレオン没落を経て、ウィーン会議で革命前の体制に戻ったが、再び共和主義と民族意識の高まりは各国の王政を揺さぶっていた。2月フランスで革命が起き、30年7月の7月王政から王位に就いていた、ルイ・フリップが王座を追われ共和制が成立。3月オーストリアのウィーンでは共和主義者の暴動により、14年のナポレオン戦争からウィーン会議体制で辣腕をふるった宰相メッテルニヒが辞任、ロンドンへ亡命。市民・学生・兵士の公安委員会が実権を握った。7月憲法制定議会が開かれ、農奴制の廃止が決められた。オーストリア支配下のイタリア、ハンガリー、ベーメン(チェコ)でも各民族の自治権を求める要求や蜂起が起きた。広大な版図を誇り「日が沈むことはない」と言われたハプスブルク帝国は多くの異民族を抱えた国家だった。宮廷はウィーンからインスブルックへ逃れた。しかし、オーストリアの軍事力は強力で保守派は武力で革命を弾圧、各地の民族蜂起もお互いの連携がなかったため各個に鎮圧された。6月ヴィンディシュ・グレーツ将軍によってベーメンの暴動が鎮圧され、政府とスラブ民族会議が解散される。イタリアでは7月ヨーゼフ・ラデツキー将軍が、イタリア統一を図るサルディニア軍を破り失地を取り戻す。10月再びウィーンに暴動が起きると、宮廷はモラビアのオルミューツに逃れる。11月ヴィンディシュ・グレーツ将軍はクロアチア人部隊を率いてウィーンを包囲して砲撃を加え奪回。11月メッテルニヒの後継者を任ずる保守派フェリックス・フォン・シュヴァルツエンベルクが宰相に就く。12月病弱で「温和な皇帝」と呼ばれたオーストリア皇帝フェルディナント1世が退位する。フェルディナント1世には子供がなく皇位継承順は弟フランツ・カールなのだが、ゾフィーの夫フランツ・カールも兄に似て平凡な人物で帝国の難局に当たるのはとても無理だと思われた。ゾフィーは宮廷に権力を振るっており、自分が皇后になるより、皇帝の母として息子の聡明なフランツ・ヨーゼフを帝位に就けた。12月2日、18歳と3カ月のフランツ・ヨーゼフはオルミューツの大司教館で即位。ゾフィーからあらかじめ皇帝になるべく帝王学を授けられたフランツは、精神的に不安定な所は無く、几帳面、勤勉で真面目な人物で軍隊式の規則正しい質素な生活をしていた。軍人として同年5月には実戦を経験している。美男でもあり、スマートで整った顔立ちは女性を騒がせていた。「ViribusUnitis(一致協力して)」を標語に掲げたフランツ・ヨーゼフは多民族国家ハプスブルク帝国の切り札として、皇帝の威信を回復しなければならなかった。49年3月フランツ・ヨーゼフは憲法を発布。オーストリアのみを単一国家とし、ハンガリーを直轄領。イタリアのロンバルディア、ベネチアを州として民族主義を押し込んだ。シュヴァルツエンベルクはクレムジールに逃れていた憲法制定議会を解散させる。10月独立を求めるハンガリーをロシア軍の援助で鎮圧。ロシア皇帝ニコライ1世はポーランドに

民族主義が波及することを懸念してオーストリアを助けた。

48年の動乱はバイエルンにも波及し、舞踏家を名乗りすでに、スキャンダルにまみれていたスペイン女性ローラ・モンテスに入れ込んだルートヴィヒ1世は、豪華な屋敷と爵位を与えて貴族、国民の不満を買っていた。やがて政治にまで口をはさみ出したローラに国民の不満は募り、国王に追放を迫った。群衆はローラの屋敷を襲撃し、ローラを追放しても騒ぎは収まらず、ルートヴィヒ1世は3月11日退位。37歳の長男マクシミリアンがマクシミリアン2世として即位した。マクシミリアン2世の妻 MARIA はプロイセン王家ホーエンツォレルン家の出身だった。

帝国領内の民族運動を武力で押え込んだオーストリアは、他国と姻戚関係を結んで帝国を強化しなければならない、政略結婚はハプスブルク家の伝統的な政策である「戦は他人にまかせておけ。幸いなオーストリアよ、汝は結婚せよ」。ゾフィーはフランツ・ヨーゼフにめぼしい皇妃を物色し始める。ゾフィーが最初に目星をつけたのはプロイセンの王女だったが、ビスマルクの反対やプロテスタントであり、更にヘッセン・カッセル国王子と婚約していたことで実現しなかった。ビスマルクはオーストリアはドイツ民族の盟主の座をめぐる競争相手であり、姻戚関係を結んで共存を図るのは考えられなかった。ゾフィーは実家のバイエルンのヴィッテルバッハ家の姪のヘレーネを思い出した。バイエルンはオーストリアと同じカトリック国で、ヴィッテルバッハとハプスブルク家の縁組みが再び実現すればプロイセンとの対抗上も都合が良い。ヘレーネは美人でおとなしく洗練されていて、皇后にはうってつけと思われた。53年8月16日ゾフィーはルートヴィカとヘレーネをウィーンから200キロほどのイシュルに呼び出した。ルートヴィカはヘレーネの妹で、おてんばなシシィも社交儀礼でも学ばせるつもりで同行させることにした。

政略結婚

ルードヴィカ一行の馬車はオーストリア・ホテルに時間より遅れて着いた。ルードヴィカは大急ぎで娘たちに身支度させた、木帳面な皇帝は時間には正確であった。皇帝は公務から短い休暇を過ごすつもりでここへやってきた。午後4時、ヘレーネとシシィの姉妹は皇帝に紹介された。ヘレーネは儀礼にのっとり美しく挨拶し、次いでシシィもうまく挨拶が出来た。しかし、皇帝の視線を独占したのは本命のヘレーネではなくシシィだった。額を出して髪を中央から分けうるんだ瞳を持ったシシィは、美人で洗練されているが型にはめられた印象のあるヘレーネよりも飾り気がなく、かえって自分になり闕達な性格が皇帝には魅力的に映った。皇帝の一目ぼれに慌てたゾフィーはシシィはまだ15歳で、礼儀も知らないいわがままに育てられた。皇妃としての準備も出来ていないと欠点をあげてヘレーネを推した。しかし、これまでは母への従順を通してきた23歳の皇帝は、はじめて自分の意見を強硬に述べたのだった。皇帝は妃は自分で決めると言い出した。翌日の昼食会でシシィは隣室に締め出されていたが、皇帝はシシィを呼び出させた、部屋に入ったシシィは勝ち誇ったように乱暴に一礼する。周囲は

好奇と非難の視線を浴びせたが、皇帝はますますシシィのとりこになってしまった。夕食会では皇帝の隣に座っていたのはなおヘレーネで、シシィは母の隣で周囲の雰囲気を感じて食事もほとんど取らずに目を伏せて、頬を染めていた。皇帝は夜の舞踏会ではぜひシシィを招きたいと言った。舞踏会では通常、皇帝自身は踊らないのが作法だった。シシィは元々出席の予定がなかったので姉の白のサテン・ドレスに対して薄いピンクのドレスを着て不安げに、一礼するかわりに皇帝の握手を求めた。オーケストラが演奏を始め45組のペアが踊り始めた、皇帝はシシィと踊る侍従のヴァクベッカーに「次ぎのポルカでエリザベートを誘うように」と言い含めた。皇帝は慣例を破って最後のダンスをシシィと踊る、皇帝はシシィから目を離さずに次のステップを教えながら踊り、花束を捧げた。これは結婚の申し込みを意味した。

オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフの一目惚れ

次の日8月18日は皇帝の23歳の誕生日だった。この日なおゾフィーは乗り気ではなかったが、皇帝はシシィとの結婚を決意していた。昼食会ではヘレーネに代わってシシィが皇帝の隣に座っていた。午後、ゾフィーは皇帝とヘレーネ、シシィを伴って馬車でザンクト・ヴォルフガングの町まで散歩に出かけた。散歩から帰ると皇帝はついにゾフィーを説得した。政治的には姉でも妹でもハプスブルク、ヴィッテルスバッハ両家の政略関係には同じ事である。しかし、ゾフィーは従順だった息子の皇帝が、初めて母の意志を退けた事が不愉快であった。はるかに年下である15歳のシシィに嫉妬さえた。しかし、ハプスブルク宮廷を支配しているのはゾフィーである、田舎者で勝手気ままなシシィには、これからハプスブルク宮廷の儀礼や作法、皇妃としての教育を施さなければならないと考えた。まず、姑としての威厳をもって皇帝に「シシィはきれいだけど、歯が黄色い」と言った。歯並びが悪いのはヴィッテルスバッハ家の血統で、自由勝手なのもまたしかりであるが、ゾフィーは既に実家の娘よりもハプスブルク家をささえる女傑であり皇帝の母、シシィの姑である。シシィは夕方、当事者として最後に結婚を告げられた。涙を流しながら「あの方を愛しています。でもあの方が皇帝でさえなければ…」「私はまだ幼いし、あの方をしあわせにしてさしあげられるのでしたら、何でもします…。けど、私にできるかしら」と運命の急転に一晩泣き明かした。

19日、早朝にゾフィーとルードヴィカは婚約を文書にして確認した。待ちきれない皇帝は早起きしてルードヴィカの元へ駆け寄り挨拶をする。母の部屋の前にいたシシィを抱き寄せ、かるく口付けをし、さっそく侍従や客にシシィを紹介した。噂はホテルから街に広がった。教会のミサに出席した皇帝とシシィは共に歩き、司祭に婚約者を紹介し祝福を願った。噂を聞きつけた群衆が教会を出る二人に花びらを降らせた。皇帝とシシィはハルシュタットへ婚約後初めての外出をする。グリュンネ伯爵が御者をつとめ、皇帝は軍服に軍帽、シシィはブルーの日傘をさし、薄い色の服で無蓋馬車に乗った。この場面は後に想像して描かれた絵に残っている。ハルシュタットからの帰途イシュルの街には蠟燭が灯され、二人のイニシャルが浮かんでいた、シシィは涙でこの光景

を見た。皇帝は画家を呼びシシィの肖像を描かせるが、やんちゃなシシィはじっとしていない。出来上がりは皇帝が満足するものではなかった。皇帝が「生涯でもっともしあわせな数週間」と述べた8月の休暇は終わり、皇帝はシシィをザルツブルクまで送ると、政務の待つウィーンへ戻った。シシィは皇后になるはずだった姉ヘレーネとともに出発し、自身が未来の皇后としてバイエルンに戻った。9月7日ウィーンの宮廷に戻った皇帝は公使を呼び、婚約を承認したバイエルン国王マクシミリアン2世へ感謝の意を伝えた。婚約者を得た皇帝は首都の戒厳令を解除し、ハンガリーの反乱者に対する死刑判決を強制労働に減刑する恩赦を与えた。

10月皇帝はミュンヘンに向かい、マクシミリアン2世夫妻を訪問し、ポツェンホーフェンのシシィの元へやってきた。伸びやかで、嫁入りの支度もろくにしていないシシィは6週間会わない間に一段と美しくなっているように見えた。15日ミュンヘンでバイエルン王妃マリアの誕生日を祝うオペラ座の公演に、2人はいっしょに初めて公式行事へ出席した。出席者から拍手と興味深い視線が注がれ、こういった場に慣れてないシシィは戸惑った。好奇の視線と公式の場の儀礼的雰囲気にはシシィは生涯慣れることは無かった。皇帝は2日間でウィーンへ戻る。ロシアとトルコが4日に開戦しており、政務に追われていた。シシィには外国語の教師が付けられた。バイエルンとオーストリアは同じ民族で方言こそあれ、同じドイツ語だが多民族国家のオーストリアには幾つもの言語と民族文化がある。シシィはフランス語、イタリア語の他にオーストリアと同時にハンガリーの言語と歴史を学ばされたが、シシィは特にハンガリーの文化に興味を持った。12月のクリスマスはシシィの16歳の誕生日でもある。皇帝はこれまでいっしょにクリスマスを過ごした母に代わりに、シシィと過ごすため、20日夜ミュンヘンに到着した。皇帝はバラの花とオウムプレゼントを贈った。54年3月4日結婚証書の署名がミュンヘンで行われ、持参金、年金の取り決めが行われた。結婚式は4月24日に行われる事に決まった。シシィは不安から憂鬱になり、心配したルートヴィカが結婚の延期を願い出たほどだった。

4月20日シシィとマクシミリアン公ら近親者一行はミサを終えると、沿道の市民に送られてバイエルンを後にオーストリアへ向かった。シシィは幼い頃から仕えてきた召し使いに贈り物を渡し、握手で別れた。これからはオーストリア皇妃として作法により握手などは出来なくなる。同日夕、婚約者を待ちきれない皇帝もウィーンを発った。翌日シシィの一行はドナウ河畔のバイエルン・オーストリア国境の町パッサウに到着した、パッサウでも歓迎の飾りと人波が満ちていた。一行は船に乗り換えドナウ河を下りリンツに向かった。オーストリアのリンツでは予定になかった事だが、皇帝が待っていた。翌日一行は皇帝の名前を冠した大型汽船フランツ・ヨーゼフ号に乗り込み、ウィーンへ向かう。シシィは疲れていたがバラのアーチが飾られた甲板に上がり岸辺に群がる人々に姿を見せた。午後、スツスドルフに着くと皇帝はピンクのロングドレスに白いコートに着替えたシシィを埠頭で抱きすくめ、2人は拍手につつまれた。シシィはゾフィー

にお辞儀をするとレースのハンカチをひかえめに人々に振り「エリザベート万歳」の歓声が上がった。ホーフブルク宮殿に着いたのは夜だった、シシィは疲れきっていた、全ては予定された儀式で周囲が勝手に自分を引っ張りまわしていた。シシィは宮殿の前庭に集まった群衆の前にバルコニーから姿を見せなければならなかった。これからはもうオーストリア皇妃として国民の前で、自分の意志などとは無関係に模範を演じなければならぬ。23日朝早くからシシィは4時間をかけて女官達に正装させられ、ホーフブルクへ馬車行列で向かった。ハプスブルク家の伝統に従って行列は夏宮テレジウムから出発し、エリザベート橋と名づけられた橋の渡り初めをした。行列の先には貴族の子女が花びらを撒いていたが、シシィは馬車の中で泣いていた。馬車はホーフブルク宮殿に到着し、シシィは馬車から降りようとして頭の宝冠をひっかけてよろける。皇帝はシシィの手を取り馬車から下ろした。ゾフィーは苦々しい視線でシシィの失態を見ていた。皇帝はシシィを伴って宮殿に入り、宮殿の聖堂で正餐式をすませ皇帝は宮殿の2人の新居に案内した。新居には26部屋が用意されていた。

4月24日ついに結婚式の日が訪れた、招待者は7万5千人。結婚の儀式は夕方からおこなわれた。シシィは金銀糸の縫い取られたサテンの服にレースのベールの裾を引き、王冠を被り胸元から腰まで白バラのブーケを飾った輝くような美しさである。行列は王室の結婚が行われるアウグスティン教会へ向かう。まず皇帝が一人で教会に入る、その後ろにゾフィーと皇帝の叔母がシシィに付き添って続く。70人の司祭を従えたラウシャー枢機卿が2人の前で説教を始めた。枢機卿は「おしゃべり」と渾名されたほど口数が多く、この時も延々と説教を続けた。2人は誓いの言葉を交わし、シシィはやっとのおもいで「はい」と小さく誓いを立てた。7時ごろ教会の鐘が儀式の終わりを告げ、礼砲と歓声が街に響いた。皇帝の馬車に乗った皇帝とシシィはホーフブルクに戻り、儀式の間で二つの王座に座って王侯貴族、各国外交官の祝辞を受けた。シシィはそれらの人々に作法に従って、差し出した手へのキスを受けていたが、親類の女性たちを見ると親しく抱擁したい思いにかられたが、既に皇后としてのしきたりに縛られていた。やがて気分が悪くなったシシィは人のいない広間に入って泣いた。従兄弟を見つけたシシィはその首に抱き着いた、あわててゾフィーが儀礼に反すると飛んできた。

厳格な宮廷儀礼

結婚式の翌朝、シシィは逃げ出したかったが、朝食は家族全員が揃うことになっていた。しかも、皇帝に促されやっとゾフィーらの好奇の視線に耐えていたシシィを置いて、皇帝は政務を執るため去ってしまった。夜には皇帝夫妻の主催する大舞踏会が開かれ、着飾った皇妃と皇帝は最後のダンスで共に踊った。翌日、大体育館でエルネスト・レントナー座のサーカスが行われ皇帝夫妻もショーを見た。シシィは馬を使った曲乗りやアクロバットに目を輝かせ、レントナーを謁見して質問を浴びせた。

ウィーンの宮廷作法は長い歴史を誇るハプスブルク家らしく16世紀からの重厚な儀

典を伝えるもので、何事にも堅苦しく定められおり、自由に育ったシシイには我慢のならないものばかりだった。その日の日程は朝、侍女が持ってくる書類に事細かく記されている。また、靴は1度しか履いてはならないとか食事の時も手袋をはめなければならない、などの決まりもあった。

皇帝の結婚に際し、恩赦の勅令が発せられ各地から恩赦への返礼使節がやってきた。皇帝とシシイはその使節団に合わせて衣装を変えて謁見したが、シシイは初めてハンガリーの使節を迎えるため民族衣装を着て現れ、拍手で迎えられた。皇帝はハンガリー使節団に訪問を約束し、皇妃を歓迎してくれるよう求めた。夏が近くなると皇帝とシシイはウィーンの南にあるラクセンブルク城に移り、蜜月をすごしたがここでもゾフィーの干渉から逃れることは出来なかった。皇帝は好きな狩猟に出かけてしまい、シシイを置き去りにすることも度々だった。皇帝は朝にウィーンに出かけ夕方にはラクセンブルクに帰る日課だったが、シシイは一人にされるのが不満で、皇帝をウィーンまで見送りたいかったがゾフィーはとんでもないことだと禁止した。ある日、シシイは皇帝について隠れてウィーンと一緒に行くことに成功したが、戻った2人はゾフィーの激しい怒りにさらされた。

[\(第2章\)](#) [\(第3章\)](#) [\(表紙\)](#)

皇帝を支える皇后の義務

皇帝夫妻の初めての公式訪問はチェコのボヘミアとモラヴィアになった。6月3日プラハへ出発した夫妻は修道院、孤児院、病院、学校を回り大歓迎を受けた。シシイの美しさはついこの前に帝国に反乱を起こしたプラハの人々の心をも熱狂させた。しかし、シシイは気分がすぐれなくなり途中でウィーンへ戻り、皇帝は一人で東ヨーロッパの訪問を続けた。ウィーンに戻ったシシイは侍医のゼーブルガー博士の診断を受け、妊娠が分かった。ゾフィーは世継ぎが生まれることに多いに満足だったが、前にもまして細かく干渉するようになる。ゾフィーはシシイに公開されている庭に出て散歩し、国民に世継ぎが生まれるのを見せるように求めた、シシイは民衆の視線に晒される外には出たくなかったがやむをえず庭に出た。それ以外の時間は部屋で犬の世話をしながら過ごした。55年3月5日シシイは女の子を出産した、名前は大公妃と同じくゾフィーと付けられた。ゾフィーはシシイから娘を取り上げてしまい、自分で指名した乳母、医者、養育係に世話をさせた。シシイは決められた時間しか娘に会うことができなかった。ゾフィーには娘はシシイの娘ではなく、オーストリアの王女として自分の手で育てられなければならない。シシイは娘を奪われた腹いせに出産から1月半ほどたったある日、馬を駆って宮廷の人々を驚かした。出産を経験してもなお美しいシシイの姿を見物する市民が押し寄せた。6月皇帝は長期視察の旅に出ることになり、シシイはバ

イエルンに里帰りした。ポツセンフォーフェンに戻るとシシィは久しぶりに自由を取り戻し、思い出深い景色や自然の中で遊んだ。

56年7月15日、シシィは2人目の娘ギーゼラを産む。ゾフィーはまたもや王女をシシィから取り上げて、手元で養育した。シシィは激しく反発したが、ゾフィーは耳を貸さなかった。しかし、シシィはこれまで嫁、姑の争いには干渉しなかった皇帝をとうとう引っ張り出すことに成功する。皇帝は子供部屋をシシィの部屋の階下に作らせ、娘と会うことをゾフィーに認めさせた。ついにささやかな勝利をつかんだシシィと皇帝は、9月オーストリア南部ケルンテン、シャタイアーマルク地方へ新婚旅行を楽しむかのように視察に出かけた。皇帝夫妻はアルプスの高原や氷河で、馬を走らせたり足で登ったりして自然を満喫する。ゾフィーは手紙で宮殿を出て行くと言ってよこしたが、皇帝はシェーンブルンに帰ってから返事を書き厳しい調子でたしなめた。

皇帝が心を砕かなければならないのは嫁、姑の確執にもまして政治問題も再び危機をはらんで来た。かつてオーストリア宰相メッテルニヒは「イタリアとは地理的概念に過ぎない」と語ったが、統一国家を求めるイタリアの民族主義はオーストリア領のロンバルディア、ベネチアに緊張を生んでいた。11月17日皇帝はシシィと共に北イタリア訪問に出発する。20日皇帝夫妻はトリエステに着いた、反オーストリア感情は強く歓迎は形ばかりで冷ややかなものだった。トリエステでは火災が起き、皇帝夫妻がアドリア海を周航する予定の船ではマストに飾り付けられた王冠が落下する。25日に訪れたベネチアでも群衆の沈黙と、空席が目立つオペラ会場が夫妻を威圧した。シシィは皇帝にイタリア人の懐柔を進言。皇帝はベネチア、ロンバルディアの総督に忠実な軍人だが強硬策をとっていたラデツキー元帥に代えて、弟のマクシミリアンを充てた。さらに、これまでの反乱暴動への恩赦を与え囚人を釈放し、資産返還を行った。シシィが初めて政治に関与した効果は再び催されたオペラ会場での拍手によって評価された。皇帝夫妻はクリスマスをベネチアで過ごすすと57年1月15日ミラノに入った。48年3月に反オーストリアの反乱を起こし「ミラノの5日間」といわれる激しい市街戦を戦ったミラノの反オーストリア感情はより強く、スカラ座の特別公演ではイタリア貴族たちは召し使いに喪服を着せて客席に座らせ、貴族らは欠席した。シシィはミラノでも恩赦と資産返還を行うよう進言し、実現させた。シシィの宥和策に対して政治家や宮廷では「皇妃は革命家の味方になってしまった」と嘆く声もあった。3月2日夫妻はミラノを去り、クレムナに寄って帰国した。

ハンガリーへの郷愁、長女の早世

5月3日、皇帝夫妻はイタリアに劣らず民族主義の高まるハンガリー訪問に出発した。シシィは以前から心引かれていたハンガリーの大地と文化に触れられるのを楽しみにしていた。シシィはゾフィーの反対を押しきって子供たちを同行させる。4日ドナウ河畔の首都ブダペストに到着した夫妻は総督アルブレヒト大公の出迎えを受け、ハンガリー陸軍大将の軍服を着た皇帝が乗馬で、シシィが馬車に乗って現れると歓声が沸

きあがった。ハンガリー人はゾフィーがハンガリー嫌いで、シシィがゾフィーとなにかにつけ対立しているのを知っており、シシィをハンガリーの擁護者と見ていた。しかし貴族達は宴席に現われなかった。皇帝はイタリアと同じくハンガリーへの恩赦を発表し、子供たちは郊外のオッフェンに残し夫妻は地方視察を行う。28 日子供たちに同行していたゼーブルガー博士から急報が入り、長女ゾフィーが危篤に陥ったという。シシィは急ぎオッフェンに帰ったが、2歳のゾフィーは夜9時半ごろ急逝した。「はしか」ともされたが医師にも原因は分からず治療の甲斐もなかった。ラクセンブルクに戻ったシシィは、誰とも会わずに部屋に引きこもり、食事も取らずにひどくやつれた。ゾフィーに立ち向かってようやく手に入れたささやかな自由は、娘の急死という大きな代償をシシィに要求した。子供を旅行に連れて行くのに反対したゾフィー大公妃の沈黙はシシィを無言のうちに糾弾していた。

ルドルフの誕生とイタリアの戦い

58年8月21日シシィはラクセンブルクで念願の男児を出産した。ハプスブルク家の世継ぎはルドルフと名づけられ、皇帝は胸に懸けていた勲章を生まれたばかりの息子のの上に置き、早速軍人として大佐に任官した。ウィーンに101発の礼砲が鳴り響き、男児の誕生を祝う興奮につつまれた。シシィはルドルフを自分の手で育てようとしたが、授乳も許されずルドルフの乳母にはゾフィーの選んだマリアンカが、養育にはカロリーネ・ヴェルデン男爵夫人が任じられた。

イタリアの統一運動は再び、オーストリアに挑戦した。サルディニア国王ヴィットリオ・エマヌエレ2世と首相カヴールは54年クリミア戦争に派兵してイギリス、フランスとの関係を強化し講和会議の席でイタリア統一への支持と、その障害となるオーストリアの支配の不当を訴えた。イギリスからは積極的な援助は得られなかったが、フランスの皇帝ナポレオン3世はボナパルト家の発祥地(ナポレオン家はコルシカ島の貴族)であるイタリアへの関心と、オーストリアの勢力を殺ぎ、またイタリアのより過激な共和主義の台頭より、サルディニア王政による統一イタリアの成立を望んでいた。58年7月ナポレオン3世はカヴールをフランスに招き、秘密会談を行う。同盟ではオーストリアとイタリアが開戦した場合フランスが20万の兵力を派兵する。オーストリア勢力をロンバルディア・ヴェネトから排除してサルディニア王国が北部イタリア王国を作る。フランスは報酬としてサボイアとニースをイタリアから割譲される。などの条項を含む同盟が59年1月成立した。オーストリアはこれを察知し、軍をピエモンテ国境に派兵し、サルディニアも動員を開始した。イギリスはオーストリア、サルディニア、フランス3国の同時撤兵を仲裁したが、ナポレオン3世はこの場に及んで国内のカトリック勢力の反発を恐れ、イギリスの提案に沿ってカヴールに撤兵を説得した。単独でオーストリアに対抗するのは困難と踏んだカヴールは、やむおえず撤兵を受け入れた。しかし、オーストリアでは主戦論が優勢で、4月19日皇帝は弟のマクシミリアンを更迭してイタリアの統治を強硬派のギウレイ将軍に命じた。さらに、メッテルニヒは諫止したが、ブ

オル外相は4月23日サルディニアに3日以内に撤兵しなければ攻撃するという最後通牒を発した。サルディニアは拒否。29日オーストリア軍は進撃を開始した。カヴールは開戦の大義名分を得てフランスは同盟に従いオーストリアに宣戦、ナポレオン3世自ら北イタリアへ出陣した。オーストリア軍のギウレイ将軍は、いちはやく南下してサルディニア、フランス両軍の連絡を阻止して各個に撃破すべきだったが、緩慢な進撃を行い戦況を悪化させた。皇帝はついに5月29日に自らオーストリア軍の指揮を執るべく、イタリア戦線へ向かった。

戦場へ赴く皇帝

シシイは同行を願ったが、戦闘への同行を許される筈も無く専用列車を途中駅まで見送り、教会で祈りを捧げ、それでも気持ちが耐え切れなときは乗馬で気を紛らわせた。6月4日ロンバルディアのミラノを目指すフランス・サルディニア軍はマジェンタ周辺でオーストリア軍の守備する鉄道駅を攻撃した。マクマオン将軍のフランス第2軍の外人部隊2個連隊はオーストリア軍の主防御線を攻撃して駅を占領したが、オーストリア軍が再び反撃して激しい白兵戦となり、外人部隊指揮官のエスピナス将軍も戦死した。戦いは夜まで続いたが日が暮れるとオーストリア軍は撤退し、ミラノ防衛は失敗した。3日後ナポレオン3世はミラノに入城した。11日オーストリアの専制政治を支えてきたメッテルニヒが死去。皇帝は無能なギウレイ将軍を解任して、アレクサンダー将軍と共に自ら前線を指揮する。北部へ後退したオーストリア軍18万は兵力に優りソルフェリーノという村に布陣、海拔200メートルほどの小高い丘の上の塔から周囲を監視していた。24日フランス・サルディニア軍は当初、優位を占めるオーストリア軍に苦戦したものの、長射程の旋条砲の砲撃と外人部隊の銃剣突撃によって血路を開き、丘の頂上まで攻め上った。オーストリア軍はミンツィオ河を渡って撤退。ソルフェリーノ戦の戦死者はフランス・サルディニア側1万7千。オーストリア側2万2千に上り、負傷兵が放置されたり捕虜が殺害されるのを見たスイス人アンリ・デュナンの著作は、国際赤十字設立運動のきっかけになった。

ロンバルディア、ヴェネト地方の大半からオーストリア軍は駆逐され、イタリアの統一は成し遂げられたかに見えた。しかし、ナポレオン3世は戦闘で勝利したものの兵力の損失が大きく、国内のカトリック勢力の反発、プロイセンが軍隊をライン地方に動員し、フランス攻撃の姿勢を取ったのを見て、サルディニアに無断でオーストリアに有利な条件で講和をもち掛けてきたのである。7月11日グイラフランカでフランツ・ヨーゼフと会見しオーストリアはロンバルディアを放棄。ヴェネトにはオーストリアの主権を認めるがイタリア連邦に参加する。パレルモ、トスカーナ、モデナ公国の復活。等でオーストリアとフランスは合意し、サルディニアに承諾を求めた。エマヌエレ2世はやむなく条件を認め、失望したカヴールは辞職しラタッツィが首相に就いた。しかし、イギリスはフランス、オーストリアを牽制するため中部イタリアの併合を支持し、パレルモ、トスカーナ、モデナ公国の旧君主は復位することができなかった。ナポレオン3世はサボ

イア、ニースが割譲されるならこれら中部をサルディニアに併合してもかまわないと提案。ラッツィはサボイア割譲に難色を示し、カヴールが復職した。カヴールはサボイア、ニースをフランスに譲る替りに中部イタリアの併合の同意を得て、パレルモ、トスカーナ、モデナ、ロマーニャで国民投票を行いサルディニアに併合した。ジュゼッペ・ガリバルディはサルディニア政府の援助の下、赤シャツの義勇軍「千人隊」を組織して60年7月両シチリア王国のシチリアを占領。8月にメッシナ海峡を渡りナポリを攻略した。

シシィの妹マリーは59年1月8日ナポリ公国(両シチリア王国)のフランチェスコ・ド・カラブル公に嫁ぎ、フェルディナンド2世の死去のためカラブル公は59年5月に即位し、フランチェスコ2世妃となった。ガリバルディは60年9月7日ナポリを占領。フランチェスコ2世はイタリア統一に反対し国民から支持されておらず、フランチェスコ2世とマリーはナポリ北西ガエダの要塞に逃れた。9月サルディニア軍はローマ教皇領を進撃し、10月26日ガリバルディ軍と合流した。ガリバルディはエマヌエレに占領地を献上し、11月7日エマヌエレ王と共にナポリで入城式を行い、自らは隠棲した。サルディニア軍はガエダを攻略、シシィは皇帝に救援を願うがオーストリア軍は敗戦の痛手から立ち直っておらず、皇帝は派兵を断った。61年2月にガエダが陥落。フランチェスコ2世とマリーはローマの法皇に保護された。カヴールはナポリ公国を国民投票でサルディニアに併合。マリーが王妃となるナポリ公国は無くなってしまった。2月14日ヴィットリオ・エマヌエレ2世はイタリア国王の称号を得て、首都をトリノとするイタリア王国が誕生した。しかし、ローマ教皇領とオーストリア領ヴェネト地方は統合が出来ず、カヴールは教皇領の統合を法皇と交渉したが6月6日急逝し、教皇領の併合は70年まで実現しなかった。

旅に逃れて

シシィは皇帝が戦地から無事に帰還したことに喜んだが、皇帝の威信は傷つき大臣や將軍の多くが敗戦の責任を問われて解任された。シシィは過度のダイエットのため食事が細り咳が止まらなくなった。診察したスコダ博士は肺の炎症という診断を下し、温暖な地方での転地療養を薦めた。皇帝はアドリア海沿岸を薦めたがシシィは大西洋のポルトガル領マデイラ島に向かう。陰鬱な宮廷を離れて旅をするシシィは生き生きとして60年11月17日出発し、バムベルクで皇帝と別れた、皇帝は別れが長くなるのを思い誕生日とクリスマスのプレゼントを渡した。イギリスのビクトリア女王のヨットでアントワープから出港しマデイラ島のクインタ・ヴィニャ宮殿に入ったシシィはイレム・フニャディ伯爵、ルドルフ・リヒテンシュタイン公爵、ラズロ・シュパザーリ伯爵らの廷臣を従えていたが、社交を嫌い一人で散歩に出たり馬を乗りこなした。咳は収まったが食事の不規則や心理面での不調は続いていた。ビクトリア女王はシシィに大型のテリア犬を送り、シシィはシャドー(影)と名づけそばに置いた。61年4月28日帰国の途に就くが途中スペインに寄り、公式の歓迎から逃れつつ闘牛を見物、マジョルカ島から

マルタ島を経て5月コルフ島に着いた。コルフ島の温暖で明るい太陽はシシィの心をとらえた。迎えに来た皇帝と船上で再会した二人はイタリア・トリエステ近郊の海を見下ろすミラアマ城に皇帝の弟マクシミリアン夫妻を訪問した。マクシミリアンは57年7月17日ベルギーのレオポルド1世の皇女シャルロットと結婚し、北イタリア総督を解任されてからトリエステの海岸沿いに作ったミラアマ城に住んでいた。シャルロットは教養が豊かで学問好きな反面、感情が激しく独占欲と義務観念が強い女性だったとされる。シシィはゾフィーに可愛がられているシャルロットとは肌が合わず、シシィの飼犬シャドーがシャルロッテのプードルを噛み殺したことも緊張をはらんだ。5月19日半年ぶりにシシィはウィーンに戻ったが4日目には咳と発熱に見舞われた。29日皇帝と共にラクセンブルクに移るが、症状は良くなる。シシィの妹マチルダとナポリ公国フランチェスコ2世の弟ルイジ・トラニー王子の結婚式がミュンヘンで行われたが出席できなかった。医師はシシィに当時は死病とされた結核の診断を下し、6月21日にシシィは皇帝の見送りを受けて再び療養のためコルフ島に向かった。

27日、シシィはマクシミリアンに伴なわれてコルフ島に着いた。島に来るとシシィの顔色は良くなり、外で遊ぶほど健康を回復する。8月に島を訪れたヘレーネはシシィの病は心の病で、宮廷でのゾフィーや皇帝との不和に有る事に気づいた。ヘレーネから話を聞いた皇帝はコルフ島へシシィを迎えに行く決心を固めた。10月13日皇帝は島を訪れてエステルハジイ夫人の解任を約束してシシィを連れ帰る、10月26日ベネチアに戻ったシシィは子供たちを呼び寄せ、まもなく皇帝もやってきて2人の時間を過ごしたがすぐに皇帝はウィーンに戻らねばならなかった。次ぎの年の4月ベネチアを訪れたルドヴィカはシシィの健康が再びすぐれないのに気づき、バイエルンのフィッシャー医師に診断させウィーンには帰らずバイエルンのキッシンゲン鉱泉で静養させた。やや回復したシシィは思いで深いポツセンフォーフェンに戻る。7月皇帝がバイエルンにやってきてシシィに帰国を懇願し、8月14日シシィは14カ月ぶりに市民の歓迎の中、ウィーンに戻ってきた。

9月23日プロイセン皇帝ヴィルヘルム1世はオットー・ビスマルクを宰相に任命。11月21日皇帝の弟カール・ルートヴィヒ大公がナポリ公国王女マリア・アヌンツィアータと再婚した。63年6月から7月末シシィは再びキッシンゲンでの鉱泉治療を受ける。7月31日皇太子ルドルフは木から落ちて頭部を打ち、一時意識を失った、この事故を皇帝はシシィには知らせなかった。12月にはルドルフは高熱に見舞われチフスを疑われたがクリスマスには回復した。12月18日カール・ルートヴィヒ夫妻に男児が生まれフランツ・フェルディナントと名づけられた。64年3月9日バイエルンではマクシミリアン2世が死去。12日シシィの幼なじみでもある18歳のルートヴィヒがルートヴィヒ2世として即位した。「軽く波打つ豊かな髪とうっすらとした口髭は、古代ギリシア彫刻の男性美を具現していた」「オリンポスから降り立った神のようだった」と称えられた。

対デンマーク戦争

64年1月プロイセンはオーストリアを誘ってデンマークに侵攻した。これは1460年デンマークがドイツ民族の多いシュレスウィヒとホルスタイン2州を併合。ナポレオン戦争時デンマークはフランス側に付いたため、ナポレオン没落後ウィーン会議でノルウェー、ポンメルを失った。シュレスウィヒとホルスタイン2州のドイツ民族にもデンマークから分離を求める気運が高まり、1848年から50年の3回に渡って戦闘が行われたが52年英、露、仏、オーストリア、プロイセン、デンマークの6カ国がロンドン議定書に調印し、結局2州はデンマークにそのまま公国として残されたが、ドイツ系住民の自治権を保障した。63年9月デンマーク王フレデリック7世は憲法を定め、シュレスウィヒとホルスタインを分離して、デンマークとドイツ人が半々の人口を構成するシュレスウィヒをデンマークに併合した。10月ドイツ連邦はこれに反対し、ザクセンとハノーバーは軍隊をホルスタインに侵攻させる、11月ビスマルクは憲法がロンドン議定書に反すると声明、11月15日フレデリック7世が急死。王には子が無く、相続がもつれ16日クリスチャン9世がホルスタイン公国の王。フレデリック8世がデンマークとシュレスウィヒ、ホルスタイン公国の王として即位。12月31日プロイセンとオーストリアは憲法の破棄を求める最後通牒を送った。

64年2月プロイセンとオーストリア連合軍5万5千は6日シュレスウィヒ市に入ったが、3月ジッペル陣地の要塞攻略に手間取り4月18日ようやく同陣地を攻略し、ガブレンツ元帥のオーストリア軍は5月ユトランド州を占領した。プロイセンの参謀総長ヘルムート・フォン・モルトケは短期決戦を進言したが、ウランゲル元帥はこれを無視した作戦を行い。デンマークは戦闘を長引かせその間に列国の干渉を得て有利な交渉条件を得ようとする、5月12日イギリスの仲介で休戦したが、シュレスウィヒとホルスタイン2州の割譲を求めるプロイセンとオーストリアにデンマークは譲らず、6月26日再度戦端が開かれた。デンマーク軍はアンセル島のゾンデルブルグ要塞に籠もり抵抗した、プロイセン軍は2度ほど上陸に失敗したが、6月29日島北部に上陸してゾンデルブルグ要塞の側面を衝き全島を占領し、ゼーランド島の首都コペンハーゲンに圧迫を加えた。クリスチャン9世はついに和議を請い10月ウィーンでガスタイン条約が結ばれ、シュレスウィヒ、ホルスタイン2州とラウエンブルグをプロイセン、オーストリアに割譲した。プロイセンはシュレスウィヒを、オーストリアはホルスタインを勝ち取り、ラウエンブルグはいったんオーストリアに渡され、代金を支払ってプロイセンに売却され、キール港はドイツ連邦の領地になった。これによってプロイセンはドイツ連邦への発言権を強め、北海へ出る航路を確保した。オーストリアはプロイセンの強大化を恐れ、シュレスウィヒ、ホルスタイン2州を独立させて自国の勢力下に収めたかったがこれは成らなかった。シシィはラクセンブルクに病院を開き負傷兵の手当に献身した。

マクシミリアンとシャルロット

4月10日イタリアのミラアマ城で戴冠式を行った皇帝の弟マクシミリアンとシャルロット夫妻は14日メキシコの帝位に就くべく、戦艦「ノヴァラ」号でメキシコの港ベラクルスに

向かった。メキシコでは61年大統領ファレスが対外債権の支払を停止、債権を持っていたイギリス、フランス、旧宗主国スペイン3国は62年1月共同して出兵した。しかし内戦で荒廃したメキシコの債権の回収は不可能で、4月にはイギリス、スペインが撤兵してしまい、中米進出に執念を燃やすフランスのナポレオン3世のみがメキシコのカトリック勢力を土台に新政権を樹立して影響下に置くべく、兵力を増強して送り込んだ。ナポレオン3世はヨーロッパ王室の血統をメキシコの帝位に付けて帝政を樹立しようとした。ナポレオン3世は利権の回復を狙うメキシコ外交官ギテレス・デストラダ、ホセ・イダルゴらからヴィージェニイ皇后を通じて、盛んに干渉を要請されていた。マクシミリアンは兄にイタリア総督を解任されて以来、無為な時間を過ごしており妻シャルロットは、皇后になれるかもしれないこの話に大いに乗り気であった。フランス軍はメキシコシティに入城すると国民議会を招集してマクシミリアンを皇帝に推戴する決議を行った。マクシミリアンはシャルロットの父レオポルド王に相談すると、メキシコ国民から要請を受けて帝位に就く、英仏に支援を約束させる、なら受諾すべきだとの返答を得た。シシィとゾフィーは遠い異郷の国へ行く事には反対した。皇帝は最初マクシミリアンを翻意させようとしたが結局即位に同意した。しかし、メキシコの帝位に就くなら皇位継承権とハプスブルク家大公の地位を放棄するよう要求する。マクシミリアンは激怒し、ゾフィーは皇帝をとりなそうとするが皇帝はついに応じなかった。ナポレオン3世はマクシミリアンに、現地軍を編成するまで2万5千の軍を駐留させる、外人部隊8千の8年間駐留、軍費調達のため国債の発行を約束した。マクシミリアンは隠遁的な生活続けるか、メキシコでの帝位かを大いに悩んだがついに決意し、皇位継承権を放棄する書類に署名し翌日、メキシコ国民会議代表団を謁見した。メキシコ皇帝戴冠式の後、マクシミリアンは謁見室からひとり姿を消し、シャルロットは祝宴で「これからは皇后と呼んで下さい」と振れ回った。6月12日メキシコ皇帝夫妻はメキシコシティに入り、義杖隊と群衆の出迎えを受けて宮殿に入った。

バイエルン国王とワーグナー

バイエルン国王に即位したルートヴィヒ2世は64年4月秘書官長プフィースターマイスター男爵を呼び出すと、リヒャルト・ワーグナーの居所を突き止めるように命じた。男爵は政治がらみの用件での話しがあるのかと思っていたため「ワーグナーとは何者でしょうか…」と尋ねた。国王の説明でワーグナーが作曲家であることを理解した男爵は早速、ミュンヘンの滞在者を調べたがワーグナーは見つからなかったためウィーンへ向かった。ワーグナーの搜索は秘密裏に行い、国王の元に連れてくるようにとの命である。男爵の任務は困難だった。ワーグナーは1813年ライプチヒに生まれ音楽を学び、38年には初めてのオペラを上演、43年「さまよえるオランダ人」を上演、ドレスデンの王室劇場首席指揮者に就任したが49年の革命騒ぎに関わったため逃亡し、警察の手配を受けている。スイス、フランス、イタリア、オーストリアを転々とし各地で作品を作り61年パリで「タンホイザー」を上演。翌年のウィーンでの公演ではシシィの

拍手を浴びたが、熱狂的に支持する者もいる半面、酷評も多く公演は赤字続きで借金に追われ、絶望して3月末ミュンヘンで自らの墓碑銘を記していた。5月3日シュツットガルトでワーグナーを探し出したプフィースターマイスターはルートヴィヒ2世からの伺候を求める親書と贈り物を渡した。貧窮していたワーグナーにとってはまさに奇跡のような出来事で、王に感謝の電報を打つとさっそくミュンヘンへ向かい、4日ルートヴィヒ2世の謁見を受ける。芸術と美を追求する若い青年王と、30歳も年長で挫折と栄光の人生を送ってきた音楽家、2人の初めての会話は1時間半にわたった。「王はあまりに美しいので、夢のように消えてしまわぬか心配だが、彼こそ私の幸福の全部であり、もし彼が死ねば私も次ぎの瞬間には死ぬ」とワーグナーは記した。ルートヴィヒはワーグナーの借金を肩代わりし、城から程近いスタルンベルク湖に面した屋敷を与える。ルートヴィヒとワーグナーは作品の上演計画を作った、65年「トリスタン」「ニュールンベルゲンのマイスタージンガー」70年「パルシファル」。ワーグナーは計画の実現のため指揮者のフォン・ビューロー夫妻をバイエルンに呼び寄せた。ビューローの妻はハンガリー人の作曲家リストの娘コジマである。6月末ルートヴィヒはキッシンゲンに静養していたシシィと皇帝夫妻を訪問した。

普墺戦争の敗北

対デンマーク戦でオーストリアと同盟したプロイセンのビスマルクはドイツ民族の覇権を狙い、オーストリアを挑発しガスタイン条約でいったん危機は回避されたものの、ビスマルクは何としてもオーストリアとの開戦を欲していた。まず、フランスのナポレオン3世にライン左岸の割譲を取り引き材料に、対オーストリア戦での中立をもちかけ密約を結ぶ。66年4月にはイタリアに勝利の際ベネチアを与えることで同盟を結んだ。6月プロイセン軍はシュレスウィヒからホルスタインに侵攻した。ワイマール、メクレンブルグはプロイセン側。ハノーバー、ザクセン、ヘッセン、ウェルテンベルグ、バイエルンがオーストリアに立って参戦した。プロイセン軍66万は軍備拡充と訓練に務め新型武器を装備し、参謀総長モルトケの作戦下、鉄道を使った高速の動員と移動が出来たのに対し、オーストリア軍60万は装備が旧式で動員が遅く、イタリア方面にも兵力を割かなければならなかった。オーストリア軍は初めから守勢に回り、イタリア方面ではオーストリア南方軍15万がイタリア軍を破った。ベネデックのオーストリア北方軍24万とバイエルン・カール親王の同盟軍12万が西部ドイツとベーメンの2方面から侵攻したプロイセン軍30万と戦った。オーストリア軍はオルミュッツに集結し、プロイセン軍がベーメンに進むかシュレジェンから西南進するも、いずれの場合にも対応できる配置を取った。6月14日プロイセン軍はハノーバー、ヘッセンに侵入。15日プロイセンのエルベ軍はザクセンに侵攻し18日ドレスデンを占領。オーストリア軍主力はオルミュッツからエルベ河畔ヨセフスタットに前進したが、大兵力の移動には時間が掛かりザクセン軍の救援には間に合わなかった。オーストリア軍は6月27日から28日にプロイセン第2軍がリーゼン山脈の隘路から進出しようとするのを攻撃したが、積極的戦意に欠

けプロイセン軍を各個撃破する好機を逃し、プラハ北東 100 キロのケーニヒグレーツ西高地に撤退した。モルトケはギッチン付近で1、2、エルベの3軍に連合を命じ、28日第1軍はザクセン軍をミュンヘングレーツで撃破し、第2軍とベーメンで連絡に成功する。第1軍とエルベ軍はケーニヒグレーツに向かって前進した。7月2日夜、ケーニヒグレーツ付近でオーストリア軍がエルベ河西岸にまだ陣地に付かないまゝいるのを知ると、第1軍は直ちに攻撃することにし、第2軍に敵背面を攻撃するよう伝令を出し来援を頼んだ。3日朝、第1軍は第2軍の到着を待たずに攻撃を開始し、不意をついてオーストリア軍北面の森を占領した。態勢を立て直したオーストリア軍は奪還のため、正面の第1軍団に加えて陣地の右翼で配置に就いていた第2、4軍団を投入してプロイセン軍に反撃し、砲 250 門の砲撃を浴びせられたプロイセン第1軍は苦戦に陥った。戦況を見ていたウィルヘルム1世やビスマルクは焦慮の表情を浮かべたが、モルトケは平然として第2軍の戦場への到着を待った。果たして、午後1時ごろプロイセン第2軍が東から現われ、オーストリア2、4軍団が出撃して空になった右翼を襲った。これによってオーストリア軍の戦線は崩壊し、2万4千の損害を出してエルベ河東に壊走した。プロイセン軍も損害と疲労が多く2日後までオーストリア軍を追撃しなかったため、オーストリア軍は包囲を免れた撤退したが、このケーニヒグレーツの敗戦は戦争の帰趨を決定付けた。4日バイエルン軍もキッシンゲンで降伏。7月20日フォン・テゲトフ少将のオーストリア艦隊はリッサ島付近の海戦でイタリア艦隊を破るが、すでに戦局を覆すことはできない。

18日プロイセン軍はあと2日前進すれば首都ウィーンに入れる所までやってきた。ウィーンでは市民がプロイセン軍の入城を恐れ逃げ出し始める。シシィは負傷兵を見舞い、そばにいてくれるよう懇願する負傷兵の手を握って手術に立ち会った。しかし、ビスマルクはモルトケにウィーン進撃を中止させた。オーストリア軍主力を破った以上ウィーン占領は簡単だが、それによってオーストリアがドナウ河やハンガリーで抵抗を続けた場合、長期戦になる。その場合フランスが介入するとプロイセンは挟撃されることになる。決戦で勝利し、ドイツ連邦の覇権を手中にした以上はオーストリアと講和してフランスに備えなければならない。と考えたためである。戦争は7週間で終わり、8月にプラハで講和会議が開かれた。オーストリアはイタリアに残る最後の領土ベネチアを失い、賠償金を支払う。プロイセンはシュレスウィヒ、ホルスタインを得て北ドイツ連邦が成立した。

[\(第3章\)\(第1章\)\(表紙\)](#)

オーストリア・ハンガリー2重帝国

普墺戦争の敗北によって、オーストリア帝国はドイツ民族の盟主の座を失い、ハプスブルク帝国は分裂の危機を迎えた。シシィはハンガリーに自治権を認めて帝国の分裂を防ぎ、緩やかな連邦によってハプスブルク帝国を維持すべきだと皇帝に進言した。皇帝は始めハンガリーへの譲歩を渋ったが、帝国保持のためにはハンガリーの自治権を認めざるを得ないと決意した。67年ハンガリー王国の独立を認める。ただし、オーストリア皇帝がハンガリー国王を兼ね（つまりフランツ・ヨーゼフひとり）、ハンガリーが独自の国土と首都を持ち、内閣と議会を運営。外交、財政、軍事をオーストリアと共有する「アウグスライヒ」が成り、オーストリア・ハンガリー2重帝国が成立した。オーストリアとハンガリーはライタ川を境界に内ライタニアと外ライタニアに分かれ、ハンガリーの初代首相には穏健な民族主義者グユーラ・アンドラーシ伯爵が就任した。これによって多民族国家ハプスブルク帝国の瓦解は食い止められたが、ハンガリーのマジャール人以外の民族、チェコ人やクロアチア人、ルーマニア人、なお残るイタリア人などには自治は与えられず、オーストリア、ハンガリー両政府が異民族を引き続き統治することには代わりなかった。

67年6月8日ハンガリー国王の戴冠式がブダで行われた。聖シュテファン教会で皇帝は、アンドラーシからやや傾いた十字架を飾ったハンガリーの王冠を受け取り戴冠した。続いてシシィの右肩に王冠が置かれハンガリー王妃としての戴冠が行われた。ハンガリー軍元帥の制服を着た皇帝は、馬に跨り小高い盛り土の上で剣を抜き、東西南北の虚空に十字を切って即位の儀式を行いハンガリーの王位に就いた。シシィが大聖堂を出るとハンガリー人の「エルジェベト万歳」の声が上がった。戴冠のミサ曲を作った作曲家のフランツ・リストは「これほど美しい王妃を見た事が無い、王妃は天の幻のようだった」と手紙に書いた。皇帝はこの日のシシィの肖像画を描かせると宮殿の執務室に掛けさせた。12日皇帝とシシィはハンガリーを後にした。6月、皇帝の従妹マチルダが不注意から大火傷を負ってしまった。マチルダは観劇で出かける身繕いをしていて煙草の火が衣服に燃え移り、火傷に苦しんだあげく7月6日に死去した。

メキシコ皇帝マクシミリアンの最後

6月26日ごろ皇帝とシシィの元へ悲報が届いた。6月19日メキシコ皇帝マクシミリアンが共和派に銃殺されたという。ナポレオン3世のメキシコ帝国建設の野望によって帝位を受けたマクシミリアンだが、メキシコに着いてみると共和派と帝国軍の内戦は凄惨を極め、双方ともに残虐行為を行い住民は恐怖に脅えた。メキシコ帝国を認めない大統領ベニト・ファレスはマクシミリアンの対話要請を拒否してカトリック教会を襲撃し、僧侶・信徒を虐殺した。フランソア・パゼーヌ将軍の率いる帝国軍のフランス外人部隊と現地人のメキシコ国民軍は、僅かな地域と拠点を保持しているだけだった。マクシミリアンは現地の情勢を好転させようとしたが次第に政治への関心を失い。首都メキシコ・シティの宮殿を改築し、クエルナヴァアに離宮を建設し豪華な晩餐会やオペラ

公演を行わせた。代わって妻シャルロットが宮廷行事や政治問題に取り組む。65年4月隣国アメリカで南北戦争が終わると、アメリカ大統領ジョンソンはメキシコの共和派を公然と支援し、軍事物資を援助した。一方のフランスは軍事費が増大するにもかかわらず、債務の回収は進まず国民議会ではメキシコ介入を打ち切るべしとの議論が交わされる。ナポレオン3世は普欧戦争でオーストリアが敗北しフランスとプロイセンに緊張が強まるとメキシコを顧みる余裕は無くなってきた。66年6月ついにマクシミリアンにフランス軍の撤兵を通知した。8月シャルロットは夫に代わってパリに向かい居留守を使うナポレオン3世に面会を要求した。サン・クルウ離宮でナポレオン3世に面会したシャルロットはフランスの背信をなじり、援軍を求めた。ナポレオン3世は閣議決定を示してもはやメキシコには一兵も1フランも送れないと釈明した、シャルロットはかつてナポレオン3世があくまでマクシミリアンを援助すると記した書簡をかざして背信を責めたが、ナポレオン3世は席を立ってしまった。シャルロットは逆上して精神を病み、夫にナポレオン3世への工作が失敗したことを知らせる手紙をしたためたが、興奮状態で意味を成さなかった。シャルロットはかつて住んだイタリアのミラアマ城を経てローマへ向かい、法皇ピオ9世に会ったが、謀殺の陰謀があるとわめき、晩餐会の食事や飲み物には毒が盛られているとして手を付けず、外へ出て噴水の水を飲み干した。夜間に法皇の元へ馬車を走らせると強引に面会し、出された法皇の分のスープを嘗めて安全を確かめると飲んでしまった。シャルロットは法皇にフランスの裏切りをなじり、教会の威光を守るために十字軍を派遣して欲しいと頼んだ。法皇や側近がなだめたが聞き入れず女人禁制の禁を侵してバチカン宮殿に留まった。ベルギーから実弟が駆けつけ、精神に異常を来したシャルロットをミラアマ城に軟禁した。67年2月フランス軍2万3千はメキシコから撤退していった。残ったのはヨーロッパからの義勇軍、傭兵といつ寝返るとも分らないメキシコ国民軍だった。マクシミリアンはナポレオン3世の勧めで退位して帰国することも考えたが、シャルロットが帝位に固執し、これまで楽観的な私信しか送ってなかった母のゾフィーからは「おめおめ退位して恥をさらすよりはハプスブルク家の名誉を守って堂々たる進退をするように…」との書簡を受け取っていた。それにマクシミリアンはメキシコ帝位を受けるに当たってハプスブルク家の皇位継承権を放棄していた。マクシミリアンには出生に関してある噂があった。オーストリア皇女マリー・ルイーゼとナポレオン1世の息子ライヒシュタット公(ローマ王)との不義で生まれたというものである。ゾフィーはナポレオン1世の没落後メッテルニヒによって、ウィーンに軟禁状態にされたライヒシュタット公と恋愛関係を持っていたという。ライヒシュタット公は32年6月24日21歳で病死したが、ゾフィーはライヒシュタット公を献身的に看病し、7月6日にマクシミリアンを産んでいる。事実とするとマクシミリアンはナポレオン1世の孫として、祖父の栄光と軍事的才能を受け継いでいるかもしれない。マクシミリアンは自ら9千のメキシコ国民軍を率いて首都北方のケレタロへ出撃した。共和派は退き、皇帝軍はケレタロに入城した。ケレタロは盆地で守りに

くい地形でマクシミリアンはここに留まるべきではなかったが、ファレスに会談を申し入れて空しく待つ内に共和派に包囲されてしまった。首都に援軍を求めに一隊を送ったが指揮官は共和派に寝返った。皇帝軍は補給を断たれ食料・弾薬の欠乏に見舞われる。5月10日マクシミリアンは包囲を破り脱出を試みる決意を固めたが、15日明け方にはメンデス將軍の部下ロペス大尉が内通して共和派軍を市内に入れた。たちまち皇帝軍の兵士も寝返りマクシミリアンは僅かな側近と丘に逃れるが、すでに包囲されていた。マクシミリアンは共和派のエスコベド將軍に降伏し、メンデス將軍は射殺されメキシコ帝国は瓦解した。ファレスは捕らえたマクシミリアンと国民軍のメヒア、ミラモン將軍の処刑を決め、6月12日形ばかりの裁判を行うと3人に銃殺刑の判決を下した。判決に対してヨーロッパ各国、ローマ法皇、共和派を支持したアメリカからも助命の要請がなされたが6月19日、マクシミリアンはケレタロの「鐘の丘」で銃殺された。シャルロットが精神を病んだまま死去したのは1927年1月19日、89歳であった。

ゾフィーとルートヴィヒ2世

バイエルンのルートヴィヒ2世はワーグナーをバイエルンに呼び寄せ、ミュンヘンに豪華な屋敷を与えた。67年夏の「ニーベルンゲンの指輪」の初演予定に合わせてバイロイトにオペラ上演専門の劇場建設を始める。一方、プフィースターマイスターら閣僚や国民にはワーグナーが国王に取り入り、劇場の建設費、豪華な屋敷や調度品を買い借金の請求書を国庫に回していることに対して反発が生まれた。またワーグナーはビューローの妻コジマと不倫をはたらき、65年4月コジマはイゾルデという女兒を生んだ。65年12月10日ワーグナーは駅でルートヴィヒ2世と別れを交わしミュンヘンを去った。67年1月22日バイエルン王ルートヴィヒ2世と、シシィの末の妹ゾフィーの婚約が発表された。しかし、ルートヴィヒはゾフィーにワーグナーのオペラのヒロインとシシィを重ね合わせていた。ゾフィーはワーグナーを理解し、ルートヴィヒはゾフィーのピアノに合わせてワーグナーの曲を誦じた。ルートヴィヒは手紙の中で自身をヘンリック、ゾフィーをエルザと呼び、芝居の中での出来事かのように恋を語った。だが、ワーグナーを失ったルートヴィヒは次第に現実に関心を失い、自己の世界に逃避するようになった。3月9日ルートヴィヒはワーグナーとミュンヘンで秘密裏に会見し、結婚祝いでもある「ニュールンベルクのマイスタージンガー」の総譜を受けたが「ローエングリン」の再演を話題にした際に配役をめぐる論争となり、2人はけんか分かれをしてしまいワーグナーは再びミュンヘンを去った。7月20日ルートヴィヒは偽名を使ってパリに行くとナポレオン3世夫妻と会見して、万国博覧会を視察し、オペラ座で観劇した。ヴェルサイユ宮殿ではルイ14世やマリー・アントワネットの幻を夢想する。8月になると25日に予定されていたゾフィーとの結婚式が10月12日に延期されると発表され、9月には「結婚するくらいなら湖に身を投げて死んでしまった方がましだ」と秘書官に口走った。ルートヴィヒには同性愛と年上の女性に対しての恋慕があり、現実の若い娘を愛することは無かった。ゾフィーの父親マクシミリアンはルートヴィヒに対して結婚

の履行を迫ったが、ルートヴィヒは再延期を願い出た。10月マクシミリアンはついに11月末までに結婚するよう強く要求し、10月7日ルートヴィヒはゾフィーに冷静な離別の手紙を書くと婚約の破棄を伝えた。翌年9月28日ゾフィーはアランソン公フェルディナンと結婚した。68年5月ルートヴィヒはホーエンシュヴュヴァンガウ付近の丘の上「孤立した神聖な世界でもっとも美しい場所」に巨費を投じて築城を始めた、後のノイシュヴァンシュタイン城である。

68年4月22日シシィはハンガリーで女兒を出産し、マリー・ヴァレリーと名付けられた。これまで子供を取り上げられてしまったシシィはこの子は自分の元で育て、愛情を注ぎ「やっと子供を持つ喜びを知りました」と話した。後には「この世で私に残された唯一のもの」となる。

普仏戦争とドイツ帝国の成立

イタリア戦争でニース、サボイアを得たフランスのナポレオン3世は65年10月ピアリッツでビスマルクと会談、普墺戦争ではビスマルクとの口約束でライン左岸の割譲を代償に中立を守った。普墺戦争がプロイセンの勝利で終わると、ナポレオン3世は強大なプロイセンの「北ドイツ連邦」の膨張を恐れ、南部ドイツ諸国と同盟を結ぼうとするが、ビスマルクに先手を取られた。次いでナポレオン3世はルクセンブルク公国の買収を企てたがまたもやビスマルクの横やりで妨げられ、ルクセンブルクはロンドン会議で永世中立国となった。その上約束のライン左岸領土の割譲は拒否され、フランスとプロイセンの関係は悪化した。そこへスペインで立憲君主制が成立し、68年の革命でブルボン家のイザベラ女王が追放され、空位だった国王を新たに求められた。候補者としてプロイセン王家のホーヘンツォレルン家の縁戚レオポルトが挙げられたが、ナポレオン3世は反対し、レオポルトは辞退した。しかし、ビスマルクは熱心に工作し、70年6月レオポルトは王位を受けた。ナポレオン3世は駐プロイセン大使を通じてエムスに滞在していたプロイセン国王ヴィルヘルム1世にレオポルトを辞退させるよう求めた。フランスとの戦争に乗り気ではないヴィルヘルム1世はビスマルクに相談せず、レオポルトに辞退を勧めレオポルトも7月12日辞退した。ところがフランス外相グラモンはしつこく大使に訓電し再度ヴィルヘルム1世を訪問し、今後レオポルトを候補にしないことを文書で保障するよう要求した。ヴィルヘルム1世はこの要求を断固かつ丁寧に拒否し、このいきさつをビスマルクに打電した。ビスマルクは長文の文書を短縮して、駐仏大使がヴィルヘルム1世に非礼な要求をし、国王に追い返されたように書き改めて新聞に公表した。これによって世論は沸騰し、ビスマルクの目論見通り一気に主戦論に傾いた。フランスでも主戦論が高まりナポレオン3世は戦備が整わないまま、7月19日プロイセンに宣戦してしまった。

バイエルンのルートヴィヒ2世は再び戦争に巻き込まれた。すでにプロイセンとの同盟があり中立を取ってもプロイセンが勝てば、バイエルンの独立はない。フランスに付いてもフランスが勝つ見込みはなかった。ルートヴィヒ2世はフランスの文化を好んでお

り、プロイセンとの同盟には消極的であったがもはや曖昧な態度を取ることは出来なかった。陸軍大臣フォン・プランクや首相ブライ伯はプロイセンに同盟して、動員の勅令を出すことを国王に求めた。動員令は議会で可決され、ミュンヘンのオデオン広場に集まった群衆はバルコニーに立ったルートヴィヒ2世に歓声を上げた。バイエルン軍はプロイセンの皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムが指揮する第3軍に配置された。ルートヴィヒ2世と会談し晩餐会の後オペラを観劇したヴィルヘルムは、国王の容貌がひどく変わっているのに気づいた。「顔色が悪く、前歯が抜け、顔はむくみ、贅肉が付き瞳は輝きを失っていた。神経質に話しまくり答えを待ちきれずに次ぎの質問を発し、すぐにまったく関連の無い質問をする」と日記に久しぶり会った国王の印象を書いている。

フランスの宣戦を待ち望んでいたプロイセンは、宰相ビスマルクと参謀総長モルトケ、陸相ローンらが戦争の準備を万端整えており、まさに最高の戦争指導部を作り上げていた。フランスからの宣戦によって挙国一致の戦意が盛り上がり、南部ドイツ諸国もプロイセンに同盟した。オーストリア、ロシアはフランスに味方せず、借りがある筈のイタリアはフランスが法皇領の併合を妨げたので支援をしなかった。イギリスは中立を取ったのでフランスは孤立して戦うことになってしまった。プロイセン軍は同盟軍を合わせて38万。フランス軍にはミュトライユーズ砲(初期の機関銃)が新鋭兵器として装備されており、兵力30万は全部が現役兵であるため早期に攻勢に出れば、プロイセン軍に優勢をもって当たれる勝機があった。しかし、プロイセンは戦場に向かう鉄道がフランスの4本に対し9本と整備されており、続々と動員を開始した。フランスも直ちに動員を開始したが、武器や装備を分散して貯蔵しており、応召した兵士が出頭すべき部隊は反乱防止のため居住地から離れていた。ナポレオン3世は27日メッツに向かいローレーヌ軍集団司令官パゼーヌ元帥にプロイセン軍の集結前に攻勢をかけるよう求めたが、戦備が不十分で不可能であると言われ、8月2日まで攻撃を延期、先制機を逃した。パゼーヌは外人部隊出身でナポレオン3世に引き立てられ、メキシコでフランス軍を率いて撤退後、70年にライン軍団司令官になっていた。ライン川を渡ったプロイセン軍はアルザス北部のストラズブルグとロートリンゲンに集結していたフランス軍を攻撃し、第3軍は仏アルザス軍集団を後退させた。モルトケはアルザスの東にいる仏ローレーヌ軍集団を包囲攻撃すべく第1、2軍を進出させ、8月14日メッツ東のヌイリイ、コロンベイ付近でフランス軍と衝突した。第2軍はメッツの南からフランス軍のベルダンへの退却路を遮断し、18日ローレーヌ軍集団をメッツ要塞に包囲した。ナポレオン3世はメッツ救援のためシャロン軍を新編成しマックマオン将軍と共にランスからメッツへ向かうが、モルトケは第3軍とザクセン皇太子の指揮するマース軍にセダン西南で捕捉させ、シャロン軍を破り残兵をセダン要塞に包囲した。フランス軍のミュトライユーズ砲は有効に活用されず、プロイセン軍の砲兵が装備するクルップ砲に圧倒された。9月1日ナポレオン3世はセダン要塞で降伏する。捕虜となったナポレオ

ン3世はカッセルに連行され、フランス第2帝政は崩壊した。しかしパリでは4日共和制が宣言され、ガンベッタら共和主義者が「国防政府」を結成して抗戦を継続した。15日パリがプロイセン軍に包囲された。10月2日ガンベッタが気球でパリを脱出。27日メッツのパゼーヌが17万3千人の将兵と降伏し、12月28日パリへの砲撃が開始され、71年1月19日パリも降伏した。

プロイセン国王ヴィルヘルム1世は軍がパリを包囲すると、ヴェルサイユの大本営に移り71年1月18日占領下のヴェルサイユ宮殿「鏡の間」でドイツ連邦の諸国の代表を集め、「ドイツ帝国」皇帝戴冠式を行った。フランス最長のルートヴィヒ2世は不満ではあったが、ヴィルヘルム1世をドイツ皇帝に推戴する親書に署名した。バイエルン、ヴェルテンベルク、バーデン、ヘッセン・ダルムシュタットの南ドイツ4国と北ドイツ連邦が統一され、ここにビスマルクの悲願だった(オーストリアを除く)ドイツ民族の統一が完成した。ただし、ドイツ帝国はプロイセン主体の連邦の形態をもっており、各国の君主の地位は変わらず国内政府・議会を運営し自治権を持っていた。5月10日フランクフルト講和条約が結ばれフランスはプロイセンにアルザス、ロレーヌ2州を割譲し、50億フランの賠償を支払うことで戦争が終わった。釈放されたマックマオン将軍とフランス兵捕虜はティエールがヴェルサイユに置いた政府に従い、5月末までにプロレタリアートの革命政府「パリ・コミュン」を鎮圧して約3万人の同胞を殺戮した。72年ロシア、ドイツ、オーストリアの皇帝はベルリンで革命勢力とフランスに対抗する3帝同盟に調印した。

皇太子ルドルフの結婚

72年5月大公妃ゾフィーが観劇を終えて宮殿に戻りバルコニーで涼を求めるときに寝入ってしまい、風邪をこじらせ肺炎にかかった。シシィは旅先のチロルからウィーンに戻る。シシィはゾフィーの枕元で食事もろくに摂らず看病を続けたが、5月28日ゾフィーは死去した。18年に渡り嫁と姑として、皇妃と大公妃としてシシィと事あるごとに対立したゾフィーの死は、シシィにとっては束縛からの解放だったが、なぜあれほどにも敵対しなければならなかったのか後悔を呼び起こした。

73年4月20日シシィの次女のギゼーラはバイエルンのレオポルト公と結婚した。5月1日からウィーンのプラーター公園において万国博覧会が開催された。博覧会は敗戦によって消沈した国威を発揚する場と位置付けられ日本を含めて44カ国が参加し、725万人が来場した。皇帝とシシィは各国の来賓を迎えるためスケジュールに追われた。しかし、建築ブームに沸いていたウィーンの株式市場は5月8日から暴落し、中産階級の投資家は打撃を受けた。さらにコレラの流行により入場者が減少し、万博は赤字を出して終わった。翌74年、1月8日ギゼーラは女兒を出産しシシィは36歳で孫を得る。ミュンヘンで孫を見たシシィはルドルフに「子供はギゼーラにそっくり」と手紙を書いた。シシィは周囲の諫止を押し切り病院を慰問しコレラ患者を見舞った。8月シシィはマリーヴァレリーを連れてイギリス領ワイト島に滞在した。75年にはノルマンディ

一、79年にはアイルランドとシシィは旅を繰り返し、激しい馬術訓練をして側近たちが負傷することもあった。4月24日ウィーンでは皇帝夫妻の銀婚式の祝典が行われた。80年1月アイルランドに滞在していたシシィは皇帝から帰途にベルギーへ立ち寄るよう手紙を受け取った。皇帝は皇太子ルドルフの妃としてベルギー王レオポルド2世の王女シュテファニーを意中にしていて、3月ブリュッセルに着いたシシィは同地に来ていたルドルフと会い、15歳のシュテファニーを見たシシィはシュテファニーに「ひどく幼く、肥り気味である」と感じ、ましてこの結婚は早すぎると思った。奔放な女性たちを知っていたルドルフは皇帝によって選ばれた若い妃候補に対して「愛らしく、善良で、機知に富み、しかも品があって良きオーストリア市民となるだろう」と側近に書いた。81年3月13日ロシア皇帝アレキサンドル2世は路上で爆弾を投げつけられ死亡した。5月10日ルドルフとシュテファニーの結婚式がアウグスティン教会で行われた。83年9月2日シュテファニーは長女エリザベート(エルジー)を出産する。ルドルフはシシィの自由な気質を受け継いでいたようで自由主義に傾倒を示し、皇太子といえども政治に鬻鑠を許さない皇帝との関係は次第に冷却していった。自由主義者たちと交際し、皇帝の政策とは異なる論文をペンネームで新聞に発表した。宮廷に息苦しさを感じたルドルフは、名門の出である妃シュテファニーとも疎遠になっていった。ルドルフはローマ法王に対し離婚の許しを求めたともされるが、当然許される筈はない。狩猟を好んだルドルフはウィーンの森、マイヤーリンクの修道院の荘園を買収し、宿泊施設を狩猟小屋に改装して利用した。客には狩猟仲間の他に政治的同志や若い女性たちもいた。

ルートヴィヒ2世の死

83年2月13日ワーグナーはベネチアで死去した。ルートヴィヒ2世はワーグナーの遺骸を列車でバイエルンに運ばせると全作品を創作年順に演奏させた。ルートヴィヒは白鳥の城ノイシュヴァンシュタイン、人工の洞窟を造営したリンダーホーフ、ヴェルサイユ宮殿を模したヘーレンキームゼー城と築城に情熱を傾け、莫大な建設費用は国庫を圧迫した。シシィはルートヴィヒと久しぶりにスタンベルク湖上の薔薇島で再会し、ルートヴィヒが肥満して顔がむくんでいるのに驚いたが、長い時間語り合い昔のように手紙で鳩、鷺と呼び合った。しかし、ルートヴィヒの奇行は次第に激しくなっていった。食事の際にはレイ14世やマリー・アントワネットの席を用意させ、肖像に向かってフランス語で語りかけた。86年6月政府の閣僚らはずいにルートヴィヒ2世の廃位を計画した。ルートヴィヒの叔父ルイトポルト公を摂政に据えて、ルートヴィヒを弟のオットーと同じく精神病患者として幽閉しようというものだった。フライヤー・フォン・ルッツ首相らはミュンヘンの精神科医師フォン・グッデン博士にルートヴィヒ2世が精神異常で王権の維持は不可能であると診断させるため(診断する前から結果は決められていたが)ノイシュヴァンシュタイン城に委員会を向かわせた。ルートヴィヒ2世はベルク城に監禁された。6月13日ルートヴィヒはグッデンとスタンベルク湖畔で朝の散歩をし午

後にも散歩を望んだ、グッデンはルートヴィヒの状態は安定しているとして朝の散歩では付けていた護衛を断り、午後4時半頃「8時には戻る」と告げるとルートヴィヒと2人だけで湖畔へ向かった。しかし、時間を過ぎても2人は戻らなかった。激しい雨が降り出した中で捜索が開始されやがてスタンベルク湖の岸辺でルートヴィヒの上着やグッデンの傘や帽子が見つかった、湖へボートが漕ぎ出されると10時半ごろ上着を脱いだ状態でルートヴィヒの身体が見つかり、間もなくグッデンの身体も発見される。ミューラー医師らは必死に蘇生を試みたが無駄だった。ルートヴィヒの時計は6時54分で、グッデンのものは8時で止まっていた。岸辺には格闘した足跡があり、グッデンの首には擦過傷がみられた。ルートヴィヒには外傷がなく心臓麻痺か窒息による死が推測された。水泳の得意なルートヴィヒがどこかへ逃亡しようとして上着を脱いで湖に入ったが阻止しようとしたグッデンと水中で格闘となり扼殺したが、心臓麻痺を起こして死亡した。入水自殺をしようとするルートヴィヒを止めようとしたグッデンが格闘の後に扼殺され、ルートヴィヒはそのまま湖中で自殺した。謎を残したままルートヴィヒ2世は41歳で死んだ。シシィは「彼は狂人ではなかった、一風変わっていていつも夢見っていたの、もう少し気を遣ってあげていれば、あんな悲劇的な最後にはならなかったはずよ」と悲しんだ。この日シシィはスタンベルク湖畔に滞在しており、軟禁されたルートヴィヒを助け出すためにベルク城前に馬車を向かわせたとする説があるが確証はない。85年ごろシシィは旅に出て皇帝の側に居ない自分の代わりに、ブルク劇場の女優カタリーナ・シュラットと皇帝の交際を取り持ち、シュラットの肖像画を描かせて皇帝に送らせたり、夫妻一緒の場にも同席させた。87年シシィは再びウィーンを離れ旅を続ける生活に逃れた。ハンガリーから7月にはハンブルクからイギリスへ渡りヴィクトリア女王を訪問し、バイエルンに戻る。10月には再び皇室用ヨットでギリシャへ向かった。ヨットには新鮮なミルクを得るために乳牛が載せられていた。シシィは体型を維持するため卵とミルクくらいしか食事をしなかったが、旅先で良質な乳牛を見つけると自分用の酪農場に送っていた。宮殿には体操器具が置かれ、美しい髪は毎日3時間かけて手入れされた。身長172センチ、体重46.6キログラム(1896年12月の記録による)の体型は60歳で死去する時まで変わらなかったという。コルフ島では古代神殿様式の館を建てるため、用地の物色をした。12月24日シシィは50歳の誕生日を迎えた。88年11月15日、シシィの父親マクシミリアンが80歳で死去する。12月2日、皇帝の在位40年を記念する式典が行われた。この日、マリーヴァレリーとトスカーナ大公フランツ・サルヴァトーレの婚約が発表された。トスカーナ大公は領地が無く名目上の地位だったが、相思相愛の間柄でシシィは2人のために皇帝を説得した。実際の結婚は90年7月31日になる。

皇太子ルドルフの死

89年1月29日ハンガリーへの出発を前にしたシシィと皇帝は家族での晩餐会を行ったが、マイヤーリンクの狩猟小屋に滞在していた皇太子ルドルフは風邪を理由に出席し

なかった。30日朝、従僕のリシェクはルドルフを起こそうと部屋のドアを何回もノックしたが返事は無かった。ついにリシェクはオヨス伯爵らを呼ぶと施錠されたドアを斧で壊して部屋に入る。そこにはルドルフと女が血を流して横たわっていた。女は17歳の男爵令嬢マリー・ヴェッツェラで前夜からルドルフと同室していた。2人とも銃弾を頭に受けて死んでおり、弾倉が空になったピストルが床に落ちていた。ルドルフがマリーを射殺した後、自分も頭を撃って自殺した心中と推測された。この事件は死の状況について箝口令が敷かれたため、現在も様々な状況や動機が語られている。リシェクは朝まで事件に気づかなかつたのではなく、銃声を聞いて駆けつけ部屋に入った。ルドルフはマリー・ヴェッツェラを抱いた状態で片手でピストルを握った状態で死んでいた。マリーは裸だったとも、身支度を整えて化粧をしていたとも。部屋には争った跡があり家具が倒れて床に血だまりがあった。ルドルフの身体には格闘の痕があり、右手は手首から切り落とされていた。部屋にあったピストルはルドルフの物ではなく6発の発砲の跡があった。ルドルフとマリーは遺書を書いていた。ルドルフは何者かに暗殺された。などで、オーストリア最後の皇后になるツィタは晩年の1983年になってから「ルドルフ皇太子は自殺したのではなく、政治的な動機で暗殺された」と語った事もある。ルドルフの死は自殺を禁じるカトリックの教義により病死と発表され、遺体はホーフブルクに戻ると2月5日カプツィーナ教会で葬儀が行われハプスブルク家歴代の地下霊廟に安置された。マリーはそこには居なかつた事にされて1月30日夜、死体は馬車に載せて運び出されマイヤーリイクに近いハイリゲンクロイツ修道院の墓地に埋葬された。ルドルフの葬儀には参列しなかつたシシィは2月9日、一人で霊廟に下りて祈りを捧げた。皇帝は狩猟小屋を取り壊し跡地に教会と尼僧院を建てた。唯一人の直系男子を失った皇帝は皇位継承者に弟カール・ルートヴィヒの子である甥のフランツ・フェルディナントを就けた。

92年1月26日シシィの母、ルートヴィカが死去し、翌日マリー・ヴァレリーが女兒を生んだ。この女兒もエリザベートと名付けられた。96年5月2日皇帝とシシィはハンガリー建国千年祭の祝典に出席し、シシィは黒づくめの衣装で現れその姿は「悲しみの聖母」のようだったという。シシィはルドルフの死後、衣装を女官らに下げ渡し、人前には黒の衣装に扇で顔を隠して現れた。97年5月4日、パリの慈善バザー会場で火災が起き150人の死者が出た。その犠牲者の中にシシィの妹アランソン公夫人ゾフィーがいた、彼女は周りの令嬢や売り子たちを先に逃げさせたが、自らは出口を求めて殺到する群衆に踏み倒されて炎に焼かれ遺体は歯科医の検視によって身元を確認された。

ついにシシィに迫る死

1898年夏の間イシュルに滞在していたシシィは皇帝の見送りを受けて、旅へ出た。9月9日テリテから蒸気船でレマン湖を渡り、スイスのジュネーブに着き郊外プレニーのロチルド(ロスチャイルド)男爵の別荘で男爵夫人らと会食した。シシィはこの料理が

気に入りめずらしく食事を堪能すると、女官にメニューを皇帝に送るよう言いつけた。翌 10 日、シシィと女官シューターレイ伯爵夫人の 2 人は 1 時 40 分発の船に乗るため宿泊先のホテル・ポー・リヴァージュを 13 時半過ぎに後にした。ホテルではシシィはいつものようにお忍びの旅行であるためホーエネンプス伯爵夫人の名前で宿泊していた。一行は随員など総勢 12 名だったが、シシィが人数が増えるのを嫌ったため既に何人かは汽車でジュネーブへ向かい、スイス警察の護衛も断っていた。シシィは黒の帽子と衣装に、扇と日傘を持って船が出航の汽笛を鳴らすモン・ブラン埠頭へ向かって歩き出す。そこへ男が 2 人の前に向かってきた、2 人はよけて道を譲ろうとしたが男はシシィをすれ違いざま手で胸のあたりを殴ったように見えた、シシィは無言で崩れるように倒れ、シューターレイ夫人は悲鳴を上げた。通りがかりの者と夫人はシシィを助け起こし、走って逃げた男は反対側から来た通行人に取り押さえられた。シシィは助け起こされると「痛みはありませんか」と聞く夫人に「なんでもありません、あの男は時計を取りたかったのでしょうか」と答えてホテルに戻らず船着き場まで歩き船に乗り込んだ。しかし、シシィの顔からは血の気が引いて青ざめ、夫人が支えると意識を失い上甲板のベンチに横たえられた。夫人はドレスの胸を開き呼吸を助けるためコルセットを開け、酒を含ませた角砂糖を口に入れた。シシィはいったん意識を回復し「私はいったいどうしたの」と問いかけたが、夫人は薄紫のブラウスに血が染み出ているのを見つけ、右の乳の上には傷口が開いていた。夫人は「大変、暗殺です」と叫び、船長にシシィの身分を明かすと出航していた船をベルヴェに着けるよう頼んだ。船長はここでは医者も馬車も用意できないと考えジュネーブへ引き返した。シシィは再び意識を失ったまま急造の担架で運ばれてホテル・ポー・リヴァージュで医師の手当を受けたが既に脈は無く、神父が臨終の祈りを捧げた。2 時 40 分だった。

シシィを刺したのは 25 歳のイタリア人ルイジ・ルケーニ。無政府主義者のルケーニは「高位にある人なら誰でもよかった」と供述した。最初ジュネーブ滞在予定のフランス皇位継承者オルレアン公を狙った、しかしオルレアン公は予定を変更したため、次に高位の獲物としてオーストリア皇后を狙った。当日朝の新聞にはシシィが宿泊している事が報道されていた。シシィの胸を突き刺した凶器はヤスリの先端を削って鋭く尖らせた物で、外傷は小さかったが傷は肺と左心室を貫通していた。ルケーニは判事からシシィが死んだことを知らされると「アナキスト万歳」と叫んだ。無政府主義者の会合で皇后の暗殺を命じられたとの容疑もかけられたが、ルケーニは単独の犯行だと主張し謀議の証拠も得られなかった。10 月から始まった裁判で「ルケーニは皇族や金持ちは殺しても洗濯女は殺さない」と主張したルケーニは反省や後悔の態度を見せず自ら死刑を求めた。精神鑑定が行われたが結局正常であると判断され終身禁固の判決が下された。ルケーニが殺したのは皇族・貴族の階級にありながらそれを望まず、むしろそこから逃れたいと願っていた女性だった。

ハプスブルクの残照

9日午後4時半シェーンブルンの皇帝は明日、軍事演習へ出発するため準備をしていた、そこへシシィの重傷を知らせる電報を手にした侍従のパール伯爵が拝謁を願い出た。皇帝はよろめくようにして腰を下ろすと「次の知らせがあるはずだ…詳しく知りたい」と話したが、次の電報はシシィの死を伝えた。「この地上ではあらゆる不幸が私を襲う…」しかし、まだ皇帝を襲った不幸は終わったわけではなかった。棺に入れられたシシィの遺体は特別列車でウィーンに運ばれ9月16日葬儀が行われた。棺がカプツィーナ教会に着くとしきたりに従い侍従が扉を3回たたいた、修道士は「何方か？」と誰何し、死者に代わって侍従は「オーストリア・ハンガリー皇后エリザベートです、中へ入れて下さい」と答える。ハプスブルク家の伝統に則り遺骸はカプツィーナ教会、心臓はアウグスティン教会、内臓は聖シュテファン大聖堂に納められた。皇帝は「余がシシィをどれくらい愛していたかは、誰にもわからないだろう」と側近に語ったという。14年6月28日演習を視察にサラエボを訪問したフランツ・フェルディナントとゾフィー夫妻はセルビアの民族主義結社「黒手組」の青年プリンツィプによって銃撃され2人とも暗殺された。皇帝は宣戦を勅許し、オーストリア・ハンガリー帝国は7月28日セルビアに対し宣戦を布告。オーストリア・ハンガリーと同盟するドイツ帝国は8月1日、セルビアを支援するロシア帝国に宣戦を布告し、イギリス、フランスが連合側で参戦。第一次世界大戦が始まった。15年5月にはイタリアが3国同盟を裏切って連合側に戻った。大戦さなかの16年11月20日の夜、皇帝は明朝3時半に起こすように侍従に言いつけて就寝したが朝には死亡していた、86歳でありその治世は68年間に及んだ。即位したカール1世は29歳でフランツ・ヨーゼフの弟カール・ルートヴィヒの子で国民にはなじみの薄い人物だった、ブルボン家出身の皇后ツィタとは11年に結婚している。フランツ・ヨーゼフ帝の死は事実上600年以上に及ぶハプスブルク帝国の終焉となった。戦局が悪化する中でカール1世は連合側との講和を求めたが、ドイツ帝国に察知されて皇帝はドイツの戦争遂行に無条件で服従するよう求められ軍隊の指揮権を奪われた。17年にはロシア帝国に革命が起き戦線から脱落したが、4月にはアメリカが連合側で参戦し、18年ドイツ軍の西部大攻勢が阻まれ10月には同盟側側の戦線は崩壊し、オーストリア・ハンガリー軍の多民族からなる部隊は相次いで戦線を放棄した。チェコスロバキア、ハンガリー、ポーランドなどが共和国を宣言しハプスブルク帝国の領土は解体する。11月3日連合側と停戦条約が結ばれ、11日カール1世は退位表明である国事不関与の声明を出した後シェーンブルン宮殿を去って、エッカルツアウに一家と逃れた、ウィーンにはカール・レンナーを首相に共和国政府が成立。ハプスブルク家の帝政とオーストリア帝国は滅びオーストリア連邦共和国は内陸の小国に転落した。共和国政府はハプスブルク家の財産没収と国外追放を行い、19年3月カール一家はスイスへ亡命。21年の4月、11月とまだ放棄していなかったつもりのハンガリー王位への復辟を試みたが失敗し、スイスへの受け入れも拒否されたためポルトガル領マデイラ島に亡命し、翌年4月1日最後の皇帝カール

1世はこの小島において35歳で没した。最後の皇后ツィタは財産と皇位放棄に応じず、ハプスブルク家の復興を目指して活動し1989年3月14日に97歳の高齢でスイスで亡くなる。現在のハプスブルク家当主はカール1世の7人の子供の長男オットー(1912年～)で、オーストリアへの財産、皇位請求権を放棄してオーストリアに居住、欧州議会議員を務めた。バイエルンに嫁いだシシィの娘ギゼーラは1932年死去。マリー・ヴァレリーは財産請求権を放棄して弱者救済に尽力「ヴァルゼーの天使」と呼ばれる、1924年死去。ルドルフ皇太子妃シュテファニーはルドルフの死後ハンガリー貴族と再婚して1945年に死去。唯一人の皇女エリザベート(エルジー)は1902年ハンガリー貴族オットー・ヴィンディッシュグレーツと結婚し4人の子供を産んだが、帝国の解体後に離婚し、貧農出身の右翼社会民主党活動家レオポルト・ペネツクと結婚し「赤い皇女」と呼ばれた、1963年80歳で死去。シシィを暗殺したルケーニは1910年10月16日終身刑で収監されていた独房で首吊り自殺を遂げた。バイエルン王国は18年第1次大戦でドイツ帝国が敗北すると国王ルートヴィヒ3世が退位し、王政を終えた。王室の子孫はバイエルン州で造醸所を経営する。1907年6月7日皇帝フランツ・ヨーゼフは足下に2匹の犬を配したシシィの像を公園に作らせ除幕式を行った。ウィーン西駅にもシシィの石像が置かれている。ハンガリーのブダペストにはエリザベート橋がドナウ川に架かっている。

主な参考文献

「皇妃エリザベート・ハプスブルクの美神」カトリーヌ・クレマン著・田辺希久子訳・創元社

「麗しの皇妃エリザベト・オーストリア帝国の黄昏」ジャン・デ・カール著・三保元訳・中公文庫

「狂王ルートヴィヒ・夢の王国の黄昏」ジャン・デ・カール著・三保元訳・中公文庫

「ハプスブルク宮廷の恋人たち」加瀬俊一著・文春文庫

「皇妃エリザベート・ハプスブルクの涙」マリールイーゼ・フォン・インゲンハイム著・西川賢一訳・集英社文庫

「ハプスブルク家の女たち」江村洋著・講談社現代新書

「オーストリアの歴史」リチャード・リケット著・青山孝徳訳・成文社

歴史読本ワールド 95年2月「ハプスブルク家の悲劇」新人物往来社

歴史読本ワールド 94年2月「ハプスブルク家の謎」新人物往来社

歴史群像 95年12月号特集「双頭の鷲・ハプスブルク帝国のすべて」学研

「図説ハプスブルク帝国」加藤雅彦著・河出書房新社

大世界史 17「自由と統一をめざして」矢田俊隆著・文芸春秋

[\(表紙\)](#) [\(第1章\)](#) [\(第2章\)](#)